

<研究ノート>

日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居

—その保育研究部の活動を中心に—

米村 佳樹（四国大学）

1. はじめに

紙芝居は、漫画やアニメーションと並んで、日本が世界に誇る児童文化財であり、幼稚園や保育所、小学校など教育現場で教材として活用されている。この日本独自の紙芝居は、1930（昭和5）年頃、大衆の中から街頭紙芝居という形で登場し、下町の子どもたちの心を魅了していた。しかし、その内容の非教育性や売っていた飴の不衛生が批判されるに伴い、1935年以降に教育紙芝居が高橋五山や松永健哉らによって創作されるようになった。この教育紙芝居は、紙芝居の魅力を生かしながら教育性、芸術性を前面に押し出したものであり、一つの教育運動として展開された。その教育紙芝居運動の中核を担ったのが日本教育紙芝居協会である。その設立経緯や活動について、先行研究でも詳述しているが、いずれも幼児紙芝居に焦点を合わせたものではない。幼児紙芝居の生みの親と言われている高橋五山や川崎大治については、笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』（評論社、1974年）の中で取り上げられている。また、上地ちづ子『紙芝居の歴史』（久山社、1998年）では、日本教育紙芝居協会における幼児紙芝居には保育問題研究会における川崎大治の紙芝居活動がその基礎にあったことが明らかにされている。最近では、髯櫛久美子・種市淳子の論考では倉橋惣三と保育紙芝居との関わりについて検討されているが、いずれにおいても川崎大治や砥上種樹、倉橋惣三を中心とした日本教育紙芝居協会の保育研究部について考究されていない。¹

本稿は、戦中期の教育紙芝居運動の中心的存在であった日本教育紙芝居協会、特にその保育研究部が幼児紙芝居（保育紙芝居）の確立に果たした役割について、機関紙『教育紙芝居』（後に『紙芝居』）などの日本教育紙芝居協会に関する資料を用いて明らかにすることを目的にしている。具体的には、「保育と紙芝居」研究会の開催、幼児紙芝居研究会による保育紙芝居の製作、実演に関する小冊子の発行、保育所保育における紙芝居の利用に焦点を合わせて、それぞれの実態を究明する。それに先だって、日本教育紙芝居協会の設立経緯や理念、活動について素描しておきたい。

2. 日本教育紙芝居協会の設立と活動

(1) 日本教育紙芝居協会の設立経緯

① 日本教育紙芝居連盟の結成

戦中期の教育紙芝居運動の中心的役割を担った日本教育紙芝居協会の基盤となったのは、日本

教育紙芝居連盟である。その創設者は、東京帝国大学セツツルメント活動に参加していた松永健哉である。松永は、今井よねの福音紙芝居をはじめて見て紙芝居に開眼し、大学卒業後、東京市の小学校教師になってから、街頭紙芝居の悪影響から子どもたちを護ると共に、学校分野における教育の武器としての紙芝居の製作と実演に取組んだ。² 1935年には『少年探偵』『にんじん』などの自作の紙芝居を手刷で謄写して全国の希望者に配布し始めた。³ さらに彼は1936年11月に、熱心な同士たちと共に、技術の向上や作品の系統的な製作、相互の交換などを目指して日本教育紙芝居連盟を結成した。そして、当面の最高目標として、①必要にして十分な教育紙芝居の製作と、その最低廉価での利用組織の確立、②紙芝居を製作させ、実演させる過程を通じての総合的生活教育体系の樹立、③全国3万名の街頭業者改善運動への参加を挙げた。⁴

②日本教育紙芝居連盟の解消と日本教育紙芝居協会の設立

これらの目標を掲げて展開された日本教育紙芝居連盟による教育紙芝居運動は、堀尾勉によれば、紙芝居の持つ三つの特徴、第一に大衆性—誰でも、いつでも、どこでも、手軽にやれること、第二に芸術性—分かり易く、迫力があって面白いこと、第三に教育性—直接に演者（教師）の人格が訴へること、などによって教育紙芝居の優位を発揮した。しかし、作品の製作がまったく余暇による小規模なもので、絵も線描きだけの謄写版刷、大きさもベビー型と呼ばれたポスター紙十六切りと小さく、技術的に言っても絵画的要素が多く、内容も校外指導的なものが多かったという課題を抱えていた。⁵ 他方では、関係者の熱い思いや教育紙芝居の価値への人々の認識の深まり、何よりも1937年に日中戦争が勃発し、教育紙芝居運動が「国民精神総動員運動」の一翼を担うようになったことにより、各地からの要求は幼児、青年、及び大人を対象とする教育・教化へとより広汎により強くなり、松永健哉の手に負えなくなった。

こうして、日本教育紙芝居連盟は、当時帝国少年団協会主事であった大島長三郎の協力を得て、松永によって1938年7月20日に創設された日本教育紙芝居協会に解消発展された。日本教育紙芝居協会への解消発展に当って、三つの重要な理念が持ち込まれた。一つ目は教育紙芝居を徹底的に学校に普及すること、二つ目は国策紙芝居など一般成人教化紙芝居に力を入れること、三つ目は大陸宣撫紙芝居を積極的にやることである。つまり、日本教育紙芝居協会は、1938年から始まった国家総力戦の体制に組み込まれ、紙芝居を全国はもちろん大陸へ持ち込み、教育と教化の武器としての力を発揮させることになった。⁶ とりわけ、戦争が拡大した1940年、日本教育紙芝居協会が朝日新聞の出資によって設立された日本教育画劇会社と業務提携を結んだことに伴い、紙芝居はそこで大量に印刷出版されるようになり、ますます戦争遂行に協力する国策宣伝のメディアになった。⁷

(2) 日本教育紙芝居協会の設立目的とその活動

①日本教育紙芝居協会の設立目的

『趣意書及び規約』には、日本教育紙芝居協会の設立趣旨が次のように述べられている。「今日紙芝居はその廣汎なる普及にも拘らず、一般識者に正しく理解され、眞面目に研究されてゐるとは言ひ得ない。これは世人の紙芝居に對する概念が専ら街頭飴賣業者のそれに限られ、街頭紙芝居の現在の卑俗性をそのまま紙芝居の本質として受入れてゐることに因つてゐる。従来及現在に

日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居 —その保育研究部の活動を中心に—

於ける街頭業者の教養・作品の内容よりして、これは無理からぬ結果であるとは言へ、紙芝居のすばらしい大衆性と教育的効用からすれば、極めて遺憾な現状であり、又紙芝居が正しく十分に利用される場合演じうる偉大なる文化的役割を想へば、何時までもかかる現状に放任し置くことは少なからぬ國家的損失とも言へるのである。…（中略）…吾人は、以上の如き紙芝居の意義と特色に鑑み、これを以て、國策の滲透（國策紙芝居）、重要事件の報導^(マツ)（ニュース紙芝居）、社會の教化（教化紙芝居）、名作の普及（名作紙芝居）、其他健全なる娛樂の提供（特に農漁村に於ける）等、我國の政治的・文化的線に沿うて、系統的に利用し、加ふるに不斷の指導と研究により、紙芝居の正しい十分な發展に寄與すべくここに本協會を設立した次第である」⁸。

そして、日本教育紙芝居協会は、その規約第三条に目的を規定した。「本會ハ教育的紙芝居ノ普及發達ヲ圖リ、文化國策ニ積極的參加ヲ為スヲ以テ目的トス」。こうした目的を掲げて日本教育紙芝居協会は1938年7月20日に設立されたが、理事長には日本教育紙芝居連盟の時代から松永健哉の教育紙芝居運動に深い理解を示し援助してきた大島正徳（東京帝国大学講師）が就任した。常任理事として大島長三郎（帝国少年団協会主事、劇作家 青江舜二郎）と安原清太郎（恩賜財団愛育会幹事）、さらに理事として倉橋惣三（東京女子高等師範学校教授）をはじめ、小柏丑二（東京市学務課長）、河崎なつ（文化学院教授）、三浦碌郎（国民精神總動員中央連盟参与）ら11人が名を連ねている。松永健哉は、協会を実質的に運営する主事になった。⁹ 会員は、小学校教員、幼稚園保姆、社会教育家、僧侶などで構成され、とりわけ小学校関係者が多数を占めていた。

また日本教育紙芝居協会は、1938年9月5日に創刊した機関紙『教育紙芝居』（編集：堀尾勉、1940年『紙芝居』へと題名変更）に、次のような創刊の辞を記載し、教育紙芝居の特性と日本教育紙芝居協会の設立目的を公言した。「一、紙芝居は誰にもやれます、どこでもやれます、何時でもやれます。そして費用は安く、脚本の種類は無限に近く配給は迅速です。これが紙芝居の大衆性です。二、紙芝居は子供にも大人にも、文化程度に拘らず面白いものです。社會教育にも、學校教育にも、家庭教育にも、教化にも、教授にも、宣傳及娛樂にも、びつくりする程の効果をあげます。これが紙芝居の教育性です。三、しかしこれらは紙芝居の現状ではありません。現状は多くのなげかわしいものを持つてゐます。本協會は、かかる紙芝居の現状の改善と共に、独自の理論と技術によって、文化國策に一翼に逞ましく參加することを目的として生まれたものです^(マツ)」¹⁰。

②日本教育紙芝居協会の事業

日本教育紙芝居協会は、第四条に前条の目的を達成するために、次の事業を行うと規定した。一、各種紙芝居及び付属品の系統的な製作と配給、二、各種の研究調査、三、公演会・講習会・展覧会等の開催、四、作品の貸出、五、出張実演、六、機関紙及びその他印刷物の刊行、七、その他必要なる事業。機関紙『教育紙芝居』（創刊号、1938年9月）には、協会の当面の事業として4つが記されている。第一に今年一年の製作。頒布作品として国策紙芝居、教材紙芝居、幼児紙芝居の三本立てとし、毎月系統的に製作すると共に、貸出作品も希望に沿えるように新作を約百種作る。第二に今年中の講習会。教育紙芝居の本質を究明し実演技術の向上を図るため、東京市（2回）、関東地方（1回）、長崎市（1回）で講習会を開く。第三に奉仕事業。幼稚園・託児所訪問班の確立、小学校の奉仕公演、傷兵慰問方法の確立、水難地方の慰問、戦線慰問団の派遣

を行う。第四は会員の獲得。本年度末までに 4,000 名の会員を獲得する。小学校の教員だけでなく、地方の教化委員、愛国、国防婦人会員、その他工場、鉱山の幹部、宗教家に参加を呼びかける。

3. 「保育と紙芝居」—保育研究部の活動

(1) 保育研究部の設置

以上のように日本教育紙芝居協会は、国策紙芝居と教材紙芝居、幼児紙芝居を三本立てにして紙芝居の製作・頒布に取り組むことになったが、幼児紙芝居を研究する部門として保育研究部が設けられた。保育研究部は、紙芝居が子どもの世界において権威ある文化財として正しい地位を占められるように、子どもの生活環境における一現象としての紙芝居や国民保育の理念に基づく保育技術としての紙芝居など、様々な角度から紙芝居を検討し研究することを目指していた。¹¹ 保育研究部の中心メンバーは童話作家の川崎大治、幼児心理と教育の理論家であった倉橋惣三、幼児紙芝居に造詣が深かった砥上種樹（成城小学校）であったと思われる。

この保育研究部の設置は、すでに保育問題研究会で紙芝居活動に取り組んでいた川崎大治の功績によるところが大きかった。日本教育紙芝居協会に参画した川崎大治は、その経験を生かして、保育研究部における保育紙芝居の研究と創作活動の中心人物になった。川崎大治は、当時の状況を次のように語っている。「日本教育紙芝居協会は、創立以来生ける日本の刻々の情勢に應じて、国策完遂のために國民文化の向上のために、常に積極的な活動をつづけて来た。私達の部署である幼児の方面も、常に、幼き小國民^(ママ)を對象とする生活訓練・生活指導といふことを深く考へ、幼児紙芝居の確立に、實に困難な道を歩みつづけて来た」¹²。たとえ幼き少國民の練成を意識したものであっても、幼児紙芝居を専門に研究する部門が設置されたことは、幼児紙芝居の確立にとって大きな意味があった。

(2) 「保育と紙芝居」研究会

まず、保育研究部は、「保育と紙芝居」について研究するために、「保育と紙芝居」研究会を連続的に開催することにした。取り上げられる研究テーマは、社会現象としての紙芝居への関心、保育用具としての機能、創作させる試み、芸術様式としての基礎理論、脚色、絵画、取扱、演出など多方面に亘った。¹³

第一回「保育と紙芝居」研究会は、倉橋惣三と川崎大治の尽力により、1941 年 4 月 26 日、東京大塚の東京女子高等師範学校附属幼稚園において開催された。来会者は約 50 名であり、主として市内の幼稚園保母であった。砥上種樹の司会により開会され、まず倉橋惣三によって紙芝居の特長に関する理論的な講演が行われた。その概要は以下の通りである。街頭紙芝居のおじさんについて廻って、紙芝居を熱中して見ている子どもたちの顔を研究してみると、子どもたちは低級下劣で、残忍と恐怖、卑猥感による悪魔性のある街頭紙芝居の内容を楽しみ、普段満たされない満足を得て、喜んでいる。その内容面から面白がられていた街頭紙芝居に対して、教育紙芝居は、教育的であるために、面白さがとれている、すなわち、内容の激烈さでひっぱる力がなくなっている。そこで、教育紙芝居では、内容それ自身よりも形式が重要になってきた。倉橋は言う、「形式による期待の興味は、非常に大きなものですが、その期待の斷續によって、形式的快感を

日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居 ―その保育研究部の活動を中心に―

與へようとしてゐます。何よりも紙芝居は、その貼を最も大きくもつてゐます」¹⁴と。また、紙芝居は型が小さいので、集中性という点から見て非常に都合がいい。子どもたちは、机の上に置かれてある小さな舞台に集中し、非常な期待、緊張を抱く。これにより、子どもの興味は繋がる。次に倉橋は、紙芝居の絵は、説明の補助的、あるいは補足的な役割を果たすために使われる教室などにおける掛図とは全く異なるものであることを強調する。「話を聞いてゐる子供は、決して受身ではないのでありまして、お話を聞くことによつて、子供自身絶えず創作してゐるので。その子供の創作を手傳ふのが、紙芝居の繪の役目なのです。尤も創作する場合に、二つの問題があつて、その一つは、子供に創作する力がない場合と、その二は、創作するが、それが他愛ない頼りないものである場合、その創作を、他の何かによつて立證される一固められることを欲求します。その際特に役立つのが紙芝居の繪なのでありまして、決して單なる説明補助の具ではないのであります」¹⁵。

以上のような倉橋の講演に続いて、川崎大治が「保育と紙芝居」研究会についての希望、意見を述べた後、来会者の約半数が紙芝居を知らないことを勘案して、自ら実演の仕方と紹介を兼ねて『紙芝居時代』を説明しながら実演した。さらに川崎は、幼児の集団的な生活訓練をテーマにした自作の保育紙芝居『オヤマノブランコ』と、動物の性情を取扱った保育紙芝居『コグマノボウケン』を実演した。最後に砥上種樹が紙芝居『うづら』を実演し、第一回研究会は午後4時に閉会した。¹⁶

(3) 保育紙芝居の製作と頒布

① 農繁期保育所と紙芝居

日本教育紙芝居協会の保育研究部が保育紙芝居の製作に当って、その対象としたのは農繁期保育所の子どもたちであった。農繁期保育所は、農繁期である春の5月、6月の田植時、秋の10月、11月の稲刈り時に短期間（5日から2週間、長くて3週間）足手まといになる子どもを一時的に預かり、婦人の労働力を生産活動に動員させるだけでなく、次代を背負う子どもを積極的に鍛え導くという使命を持ち、年々激増していた。1935年には、学校や神社、寺、公会堂、農家などを会場に全国で5万か所も開設されていた。¹⁷しかし、数的な普及に質が伴わず、質的な向上が急務となっていた。特に、その機能を十分に発揮するのに最も必要な保育者が得がたい事情もあった。

日本教育紙芝居協会の保育研究部は、こうした実情に即し種々考究を進めた結果、「経費の低廉、施設に於て簡単、技術に於て簡易、而も保育効果に於て卓越せる機能を持つ紙芝居」¹⁸を本質的に研究し製作した。『保育と紙芝居―農繁季節保育所を主として』は、保育研究部監修による保育紙芝居に関して、次のように伝えている。「幼い子供達に與へる紙芝居は其の感化力が大きい丈に一層根柢的な研究と周到な注意を拂つて作られたものでなくてはなりません。茲に特に保育紙芝居として公にしましたものは本會保育研究部に於て幼児心理、幼児童話、幼児並繪畫保育實際に關する實際的研究の權威によつて協力作製されたものであります。特に題材に於ても、其の構成においても繪畫表現に於ても或は又言葉の上についても夫々の作品は各々特別の意圖をもつて居り、凡そ幼児の爲の紙芝居の凡ゆる性格を示してゐるものであります。農繁季節保育所の開設に當り此の機會に文化に恵まれない農村の子供達の精神の糧として、保育施設として廣く與へら

りたいものであります」¹⁹と。

②幼児紙芝居研究会による保育紙芝居の製作

農繁期保育所において大きな役割が期待された保育紙芝居を製作するに際して、現場で農村児童たちに学ぶという創作態度がとられた。この創作態度は、すでに農繁期保育所にリュックを背負って出かけ、子どもたちの興味や要望に合わせて自ら脚本した紙芝居を活用していた川崎大治の影響が大きかった。口演童話作家、巖谷小波の最後の弟子を自認していた川崎大治は、「子どもの中に入って子どもから学べ」という小波の教えを守って、農繁期保育所などに入り、子どもたちと生活を共にして、紙芝居の脚本づくりに悪戦苦闘していた。²⁰

日本教育紙芝居協会保育研究部において、保育紙芝居の企画製作を担当したのは主として幼児紙芝居研究会であった。幼児紙芝居研究会は、幼稚園や託児所、寺院、国民学校低学年教室などを会場にほとんど毎月開催され、日本教育紙芝居協会の関係者並びに作家や画家、保姆、子ども会指導者らが参加した。保育紙芝居は、こうした幼児紙芝居研究会によって、机上ではなく、常に現場に出向いて製作者、直接教育者、享受者の三者が一体となって研究され、製作された²¹。まず、川崎大治をはじめ幼児紙芝居研究会の会員たちは、農繁期保育所の研究と見学を行い、それを通して、心性の素朴さ、性格の強靱さ、自然や動物に親しむ心など、農村児童の特性などを理解し、紙芝居製作の拠り所とした。²² それから、当該年度の国の政策に対して農繁期保育所は、どういう面から協力するか、その研究の上に立って紙芝居の製作方針を定めた。さらに、その製作方針に基づいて、脚本が書かれ、絵が描かれ、それぞれ検討され、絵と脚本との照応が研究され、保育所や幼稚園、常会、公園などの現場における幾度かの試演を経て、やっと印刷に廻された²³。

③保育紙芝居の頒布

このように現場の人々との実践研究を通して、保育研究部は季節や行事を考慮し、幼児の生活や幼児の言葉、躰などにも配慮した保育紙芝居（第一輯～第四輯）を製作して頒布した。まず1940（昭和15）年度農繁季節保育所用保育紙芝居第一輯（6部1組）として、『オサルノラツパ』（作・川崎大治、絵・羽室邦彦）『三匹ノコブタ』（作・川崎大治、絵・西正世志）『小猿の恩返し』（作・川崎大治、絵・西正世志）『ユキダルマ』（作・川崎大治、絵・羽室邦彦）『カミサマトシロウサギ』（作・川崎大治、絵・西正世志）『ウグヒスノコモリウタ』の印刷紙芝居を製作し、特別頒布した。川崎大治の作品が中心となっているが、『オサルノラツパ』は彼にとっても最初の印刷紙芝居であった。

続いて、1941（昭和16）年度春農繁季節保育所用保育紙芝居第二輯（6部1組、金10円、厚生省後援）が発行された。その題名と内容は次の通りである。『キシヤゴツコ』（作・川崎大治、絵・宇田川種治、子どもたちの団体生活の訓練を、子どもたち自身の手で工夫させ、協同生活の持つ喜びを感じさせる作品）、『シロイウサギ、クロイウサギ』（作・川崎大治、絵・宇田川種治、子どもたちに衛生思想を与え清潔を守ることを徹底させる。また折紙指導をも含んでいる問答体の作品）、『カクレンボ』（作・川崎大治、絵・羽室邦彦、子どもの遊び方の指導として、自分勝手な行動を自然のうちに戒めている作品）、『つばめ』（作・堀尾勉、絵・西原比呂志、益鳥ツバメの生活を観察させ、その中で、子どもを育てる父母の愛情、また人間との交渉愛情を描いて動物愛護の

日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居 ―その保育研究部の活動を中心に―

精神を育てゆく作品)、『コネコチヤンのお日傘』(作・武田雪夫、絵・羽室邦彦、可愛い子猫やその他の動物たちの世界へ、子どもたちをつれ込み、楽しく、明るくさせる作品)、『お山のお正月』(作・亀屋原徳、絵・羽室邦彦、動物たちの世界と人間の世界を結びつけ、子どもたちに動物愛護の心を育てる役目をする作品)。²⁴ これらの紙芝居は、雑誌『国民保育』でも最も優れた保育用具として推奨された。²⁵

1941 年秋には保育紙芝居第三輯として、川崎大治の作品である『オ山ノトナリ組』(絵・羽室邦彦)『ヒヨコノモダチダレトダレ』(絵・伊藤真理)『新ちやんと赤とんぼ』(絵・清田勲)『コザルノキョクゲイ』(絵・西正世志)の四つの紙芝居に加えて、『オトギ列車』(写真紙芝居)が発行されたが、これらの紙芝居は農繁期保育所に通う子どもたちのためだけでなく幼児一般を対象にして製作された。機関紙『教育紙芝居』には、次のような広告が掲載されている。「特に幼児の感覚訓練、情操陶冶、知的啓發、總合的生活訓練等各般に意を注ぎ、今回は廣く幼児一般を対象としましたから、幼稚園、保育所等何れに於ても適切に取扱ひ得るものであります。…(中略)…何時、何處でも、誰にでも最も適切に取扱はれる様に綿密な研究メモと取扱の手引が各作品に明記してあります」²⁶。

倉橋は、「保育紙芝居をおすすめします」と題する一文で、これらの保育紙芝居を農繁期託児所だけでなく、常設保育所や幼稚園でも活用することを薦めた。彼は言う、「この保育紙芝居を皆さんにおすすめするのは、理屈ではありません、實驗と實況からです」²⁷と。また、機関紙『教育紙芝居』の編集長であった堀尾勉(青史)も、当時の保育紙芝居を次のように高く評価している。「内容については、母性愛、兄弟愛、友情、共同生活、社会的連帶、正義などがとりあげられ、表現方法としては、さしこみのひんぱんな使用…(中略)…くり返しことばの面白さ、幼児との対話ではこぶやり方を用いたがこれこそ、現場で子どもから勉強したものだ。今日の紙芝居はほとんど幼児ものになっているから、いわば川崎大治(ほかに高橋五山)の発見し、制作した手法を踏襲しているのである」²⁸。

(4) 紙芝居の実演とその技術

①紙芝居の実演研究

砥上峰次は、次のような紙芝居の定義を提示している。「紙芝居ハ、連續的ニ抜取ラレル畫、及ビソレニ附随シタ『コトバ』カラ成リ、原則トシテ梓(舞臺)ニ入レ、演者ニヨツテ、適切ナ緩急ノ下ニ畫ヲ抜取リツツ演ゼラレ、畫及『コトバ』ノ密接ナ聯關ニヨリ、一ツノ内容ヲ表現シ、小集團ヲ對象トシテノ場合ニ於テ、最高度ノ効果ヲ發揮シ得ル文化財デアル」。²⁹ こうした定義からも分かるように紙芝居では実演は絵と言葉、舞台と共に基本的な構成要素であり、実演技術の向上は欠かせない。しかし、紙芝居『うづら』に見られるように、作品そのものは急速な進歩を遂げてきたが、紙芝居は「いつでも、誰でも、どこでもやれる」という標語が徹底されすぎたためか、その進歩に実演技術が一向に追いついていなかった。³⁰

このように紙芝居の実演技術の向上が叫ばれる中、日本教育紙芝居協会において紙芝居の実演研究の中心人物であったのが、砥上峰次であつた。砥上は実演研究に従事し、その成果を著作『紙芝居の実演 第一歩の理解』と『教育紙芝居実演講座』に結実させた。彼は、いくら作者が苦心し、画家が心魂を傾けて作品を完成させても、実演者が作品や実演の相手に対して十分に理解せ

ず、技術が未熟であれば、折角の作品も台無しであると紙芝居の実演の重要性を強調する。では、紙芝居実演の巧拙は何で決まるか。砥上は、次の三点に十二分の関心が払われて、技術としての話術や操作が洗練されていれば、理想的な紙芝居が実演できると語った。第一に実演者の教養や才能、素質、並びに相手に対する愛情など、第二に作品の内容や構成に対して十分に理解し、内容を十分自分のものにすると共に、その作品の持ち味を出すために練習と研究がなされていること、第三に相手に応じて内容や速度について考慮がなされていることである。³¹

②教育紙芝居の実演技術

保育紙芝居の実演技術については、日本教育紙芝居協会は『保育と紙芝居―農繁季節保育所を主として』（砥上峰次と倉橋惣三との共著）と題する重要な小冊子を発行している。この小冊子には、紙芝居が保育の道具の一つとして、あるいは保育をより効果的にする保母の技術として子どもたちの生活の中に取り入れられるように、保育所向けの紙芝居紹介と共に実演技術の要点が記されている。

a. 紙芝居の仕組み

保育の道具の一つとして紙芝居を効果的に活用し、子どもたちを豊かな生活に導くには、まず保母たちが紙芝居の仕組み、独自の表現型をよく呑み込んでおくことが肝要である。子どもたちが喜ぶ紙芝居独自の表現型は、「具体的に目で物を見て、其の話をきき、次々に展開する場面々々への聯續發展に對する期待興味」³²にある。紙芝居の絵は、遠くから見えやすく、しかも話の中心をよく表はし、色や構図、物の形などが子どもに最も適したように作られている。また、その絵にぴったり合った言葉が適度の速さ、抑揚などの変化をもって進められつつ、その情景に合った速度で抜いていく。こうして紙芝居全体の変化、山や谷が表される。

b. 紙芝居の言葉

特に小さい子どもたちに紙芝居を見せる場合、最初の場面に全注意を集中させるために適当な枕とも言ふべき話をして、紙芝居に入る。言葉ははっきり、聞き取りやすく、かつ子どもたちに次々と暗示を与えては次に進むような速度と抑揚を必要とする。

作品にはそれぞれ抜き方の指定や言葉の調子（声の大小、高低、緩急、強弱、明暗など）、ちょっと間を置くといった注意書きがあるが、それらは全て極めて必要な研究の結果指定をしたものであるから、何故この指定があるかということをよく研究しておく。必要以上の大きな声を出して、子どもたちの想像的な気分を壊さないようにする。³³

c. 紙芝居の抜き方

抜き方は全く紙芝居独自の操作である。一場面の説明が終り、抜かれて次の場面が登場する。この場面転換が、子どもたちの一番好奇心を持つ、あるいは大きな期待を感じるところである。大きな期待感を与える上で重要な役割を果たす紙芝居の抜き方には、特に細心の注意が必要である。抜き方の指定にはいろいろあり、単純に抜く時、ゆっくり（静かに）抜く時、急に抜く時、暗示を与えるため、あるいは話を続かせるために抜きながら語るなどがある。紙芝居の実演のコツは言葉と抜き方の一致にあるので、二枚一緒に抜かないように注意深く操作したり、あるいは順序を間違えないように事前に点検したりする必要がある。³⁴

d. 実演者の位置

紙芝居を実演する際、観客が小さな舞台の紙芝居の世界に入り込めるように、演者は舞台の裏

日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居 ―その保育研究部の活動を中心に―

にすっかり姿を隠す方法が原則として望ましい。但し、声が散漫になりやすい野外で実演する場合とか、幼児を対象に実演する場合などは、舞台のすぐ側に立って姿を見せる方法でやり、必要に応じて幼児たちと問答する。砥上峰次は、「子供達は先生や実演してくれる人への信頼が強く、姿が見えないと不安といふか落ち着きを持ちにくいといふ感じがある様に思へます」³⁵と語る。舞台の側に立って演じる時には、演者も子どもと一緒に見るようなつもりで、なるべく視線を画面に注ぐと共に、時々子どもに視線を向けてやるのが望ましい。また、演者は、身振り手まねなどゼスチャーをして、子どもの注意を画面以外にそらさないように留意する。

e. 舞台と子どもの配置

紙芝居には、現実世界と紙芝居の世界を分ける境界となる舞台が是非必要である。なぜなら、観客は、舞台によって現実世界とは別の世界に入り込むことが出来るからである。³⁶ 屋外で紙芝居を演じる場合は、台を設けたり三脚を使ったりして、紙芝居の舞台を高くして子どもたち全部によく見えるようにする。子どもたちが日光を背にうけるようにすれば、画面はくっきりするし、子どもたちの視力も損なうことはない。

芝生の上や筵の上に座らせる時でも、紙芝居舞台のあまり接近しすぎていると最前列の子どもは首を上げて疲れるので、一間くらい離して置くと共に、大体舞台の中心から直角程度の内に子どもを並べると、どの子どもからもよく見える。³⁷

以上、実演技術の要点を記したが、右手和子『紙芝居のはじまりはじまり 紙芝居の上手な演じ方』（童心社、1986）、まついのりこ『紙芝居 共感のよろこび』（童心社、1998）を読むと、こうした実演技術は、現代にも継承され紙芝居実演の基礎になっていることが分かる。

4. 保育所における紙芝居の利用

(1) 保育と紙芝居の有機的関連

倉橋惣三は、保育紙芝居の利用効果について、次のように述べている。紙芝居の値打ちは、第一に子どもを惹き付けることである。どんなにいい教育や教化をしようとしても、子どもの心を捉えなければならぬが、一番手っ取り早い方法は、紙芝居である。第二は直接に子どもの心、理解にも感情にも同時に、影響できることである。こうした保育紙芝居は、常設保育所や幼稚園よりも農繁期託児所にとって便利有効である。なぜなら、人の話など静かに聴く習慣のついていない農村児童を静聴させることは容易でないが、そこへ紙芝居が持ち出されると、その瞬間から、子どもたちは大喜びするからである。保育紙芝居は面白いだけでなく、それぞれの教育が含まれている。また、保育紙芝居の妙味は、熟練家にはいくらでも巧みな使い方が出来ると共に、不馴れな初めての人でも、楽々とうまい使い方ができることにある。さらに農繁託児所としての、学校の空地でも、お寺の庫裡でも、松林でも、野原でも、簡単な運び舞台の一つで、子どもたちをしっかりと纏めていける。明日から、それを楽しみに、子どもたちが集まって来ることも、どこでも常にある。とりわけ、保育紙芝居は、幼児保育の一つの奥義である「子どもといっしょに楽しむ」、その秘伝を教えてくれる。³⁸

こうした紙芝居の利用効果が十分に発揮されるには、紙芝居が保育所の保育の中にしっかりと位置づけられ、保育と紙芝居が有機的に関連していなければならない。保育と紙芝居との有機的

関連という点に対して、川崎大治はその現状に不満を感じていた。彼は次のように言う。「今日特に氣のつく事は、紙芝居と保育とがどうも離れてゐる。一般に、紙芝居は紙芝居として演出して見せたら、それでおしまひといふのが非常に多い。紙芝居は、これからもっともっと保育の中で正しい位置を占めなければならぬ。保育との有機的な關係を持たねばならない。…（中略）…日常の保育が、紙芝居の教育的効果を助け、紙芝居が保育を助ける。保育と紙芝居とは、お互いに相作用しながら、生活全體を高めていくのである」³⁹と。

(2) 農繁期保育所の紙芝居利用状況—川崎大治による現地報告

川崎大治は、具体的に当時の農繁期保育所で紙芝居がどのように保育に利用されていたか、以下のように現地報告している。

1936年に秋田県平鹿郡旭村の塚堀保育所に手伝いに行ったことを契機に、毎年、農繁期になると、川崎大治は農繁期保育所に出かけ、子どもたちと一緒に生活することが年中行事になっていた。彼は、そうした機会に垣間見た農繁期保育所における紙芝居利用状況を次のように報告している。女子青年団、婦人会から来ていた保姆はもちろん、お寺では和尚がなかなかの紙芝居名人であり、手伝いに来ていた学校の先生方も巧みであつた。また、保育所の仕事の手伝いに来ている小学生や、子守児童が紙芝居を演じていたところもあった。種類としては、日本や外国の昔話を紙芝居化したものが多く、時たま創作童話を紙芝居にしたものもあった。保育所内に紙芝居が備へられている場合は、たいてい午前10時と午後3時前後のおやつの際に見せているところが一番多かった。その他、午前の集合直後や午後の帰宅直前に子どもたちの心を一つにするために紙芝居を利用しているところもあった。保育の中に紙芝居を取り入れて、これを観察や談話と結びつけている保育所もあったが、数は少なかった。紙芝居の利用目的は、保育のための楽しい教具としてよりも、殆ど全部が娯楽用であるといっても過言ではなかった。また、紙芝居は、大抵の場合、保育室の中だけで利用されていた。川崎大治は、こうした状況は、何処でも手軽に持っていけるといふ紙芝居の特質に照らして好ましくなく、室内に限定せずに、お天気のいい時などは、八幡様の森などで、大いに紙芝居を利用してほしいと語っている。⁴⁰

また、1943年の農繁期には岐阜県中部にある岩村や伏見村、加茂村などで5か所の共同保育所を見学したが、川崎大治はこれらの保育所における紙芝居の利用状況を報告している。まず、どのような紙芝居が用いられていたかと言えば、その8割までが日本教育紙芝居協会の作品で、2割が他社のものであった。また、どの保育所でも、紙芝居は一日の保育の中に位置づけられ、おやつ前後、遊び時間の前とかで、熱心に取り扱われていた。彼は、室内だけでなく、舞台を遠足にまで持ち出して、野や山で演じられているのを見た時は嬉しかったが、どの保育所でも、紙芝居の多様な活用は行われず、舞台の後ろに隠れて説明を読んで、一枚々々めくる標準演出というやり方だけしか見られなかったのは心残りであったと述べている。⁴¹

(3) 川崎大治による紙芝居の多様な活用

保育紙芝居の利用状況に不満を感じていた川崎大治は、率先して自作の紙芝居を農繁期保育所で生活指導・情操教育・言語教育などの各領域において大いに活用した。その理由は、次のような紙芝居の特性による。第一に紙芝居は、幼児の大好きな話と絵が一緒になっているだけでなく、

日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居 ―その保育研究部の活動を中心に―

往年の絵話に比べて動きや色彩、リズム、立体性があり、幼児の嗜好に適していることである。第二に購入や持ち運び、使用の面で、映画に比べてはるかに便利であることである。第三に、「何處でも、誰にでも出来る。而も値が安い」。こうした特性を持つ保育紙芝居は、一般の認知度も低く、保育技術の不十分さや施設の不備などもあって、子どもも嫌がり出席率が悪化していた農繁期保育所にとって、大きな効果が期待される文化財であった。⁴²

川崎による紙芝居の活用は、紙芝居の既成概念を破るくらいに自由自在であり、語り合いへの誘導、言語訓練、遊戯、お芝居ごっこ、体操遊び、描画、手技など多彩であった。ここでは、その中から標準演出、語り合いへの誘導、手技の三つの実践事例を紹介する。

①標準演出

標準演出とは、裏に書いてある説明を読みながら、一枚ずつ抜いていく普通のやり方である。しかし紙芝居の数が少ない場合には、川崎は初めからこの普通のやり方をしないで、絵と話を分離して活用してみた。例えば、『カクレンボ』という紙芝居を保育所で用いた時、まず、午前中にお話として聞かせ、午後の保育に紙芝居を見せた。子どもたちが紙芝居にすっかり馴れてきたら、今度は子どもたちにお話させたり、紙芝居をやらせたりしてみた。また『カクレンボ』や『カラダヲツヨク』などのように、一つの作品で何度も循環が出来るようになっている紙芝居は、演出の度に、多少趣向を変えてやってみるのも面白いという。例えば、一回目には、舞台の後ろに隠れて説明する、二回目には、舞台の横に立って説明する、三回目には、子どもと会話をしながら子どもと一緒に説明を進めていくというふうに演じる。⁴³

②語り合いへの誘導

標準的な演出方法で紙芝居を数回用いた後で、その紙芝居を用いながら「語り合ひ」への誘導を試みる。例えば、農繁期保育所にいる幼児の生活を題材にして製作され、その内容に手や足をきれいに洗うようにという生活訓練を盛り込んだ紙芝居『シロイウサギト、クロイウサギ』がある。川崎は、この紙芝居を見て、折角子どもたちが「やあ、五郎ちゃんは、おかしいなあ」としみじみ思っているのに、今さら改めて、頭の隅に理屈だけで道徳を押しつける必要はないと考えて、この紙芝居にある兎の折紙の場面を見ながら、子どもたちと一緒に白い兎を折った。そして、折った兎を持ちながら、兎についての語り合いを始めたのである。「兎の耳は長いか、短いか」「長い。それでは、しっぽはどうだろう。さうさう、兎は耳が長くてしっぽが短い。それではお馬はどうだろう。そうかい、お馬は、耳が短くて、しっぽが長いかい。ほほう、反対だね」など、その形について語り合う。形がすめば、今度は性質や動作である。兎は口をもぐもぐさせて草を食べるとか、色々の答えを導き出す。その後、「皆の家に、兎がいるのか。何匹いるか。何にしていたの」などと、いろいろ生活のことを尋ねる。すると、子どもたちは、家の兎は寝ていたとか、乳を飲んでいたりとか、いろいろ観察してきたことを発表する。これは、なかなか愉快であったという。川崎は、このような語り合いへの誘導はすべての保育紙芝居で出来ると述べている。⁴⁴

③手技

紙芝居から生まれた手技としては、折紙あそび、ちぎり紙、はり紙、協同製作などが多かった。

まず、折紙あそびの場合、例えば、『三匹ノコブタ』では、豚を折る。時にはクラスを三つに分けて、小さい子が山を折り、大きい子が兎と豚を折って、兎と豚が「ピョンピョン、ブーブー。ピョンピョン ブーブー」と、山登りしたり、下ったりして遊んだ。次にちぎり絵では、初めは紙芝居の中の単純な絵を手本に使う紙をちぎらしたが、しまいには手本なしで、山や木、花、家、人形、兎などを自分で作るようになったという。折紙のない時には、木の葉をちぎって、船や家、ダルマ、山を拵えた。貼り紙では、大きな新聞紙の上に、ちぎったものを程よく貼って一つの世界を拵えた。紙芝居のいろいろな場面が、美しい世界を作り上げるための豊かな刺激を子どもに与えた。地面に家が建ち、花が咲き、子どもが遊び、蛇が這い、蛙が跳ぶ。空には飛行機が飛び、太陽が輝く。協同製作では、紙芝居『キシヤゴツコ』の実演後に、子どもたちは全員で長い汽車を土の上に描いたり、木切れを拾ってきて汽車ごっこを行ったりしていた。最後に、いくつかの空箱に新聞紙を貼り、その上に折紙を貼ったり絵を描いたりして、それを一列に並べた。そして、その箱の中へ子どもたちが入り、大声で汽車ごっこの歌を大きな声でうたった。⁴⁵

5. おわりに

以上、1938年に創設された日本教育紙芝居協会の保育研究部、特に幼児紙芝居研究会の活動に焦点を合わせて、戦中期における幼児紙芝居の確立に果たした役割を究明してきた。この研究を通して、川崎大治を中心とした保育研究部が幼児紙芝居の確立に大きく貢献したことが推察される。第一に日本教育紙芝居協会では、国策完遂に前面協力した国策紙芝居とは一定の距離を置いて、幼児紙芝居（保育紙芝居）を専門に研究する部門として保育研究部が設けられたことが幼児紙芝居の確立にとって大きな意味をもった。保育研究部は、保育と紙芝居との有機的関連を意識して、紙芝居の保育用具としての機能、芸術様式としての基礎理論、脚色、絵画といったテーマに関する理論的検討を行う「保育と紙芝居」研究会を開催した。また、保育研究部に設置された「幼児紙芝居研究会」が中心となって保育所や幼稚園などの現場の人々と実践研究しながら、幼児紙芝居を製作し頒布した。その際、国策への協力を視野に入れながらも児童心理に適合させると共に、季節や行事、幼児の生活などを考慮して製作された。こうした紙芝居の製作姿勢は、農村児童と生活を共にしていた川崎大治から学んだものであった。第二に保育研究部は、川崎大治の脚本作品が大半を占めていたが、羽室邦彦や西正世志、宇田川種治などの画家の協力を得て、子どもたちを魅了する芸術性と教育性に富んだ作品を提供した。因みに堀尾勉は、次のように当時の幼児紙芝居を高く評価している。「幼児紙芝居だけは、川崎大治の努力（ほかに高橋五山）ですばらしい作品がつくられたことを銘記したい。今日でもこれを超えることはできぬほどで、この伝統が現在の紙芝居の大きなささえとなり、また出版活動ともなっている」⁴⁶。第三に紙芝居の実演についても、日本教育紙芝居協会は『保育と紙芝居―農繁季節保育所を主として』といった小冊子を発行し、誰でも演じられよう紙芝居の実演の基本を提示した。これらの実演技術は、基本的に今日においても継承されている。第四に保育と紙芝居との有機的関連についても、保育所における実態を踏まえて紙芝居の教育性を十分に発揮させるのは保育所の保育の中にしっかりと位置づけられる必要性が説かれた。また、川崎大治は保育における紙芝居の多様な活用法をその実践を通して例示した。

このように日本教育紙芝居協会の保育研究部は、幼児紙芝居の確立に大きく役割を果たしたと

日本教育紙芝居協会と幼児紙芝居 —その保育研究部の活動を中心に—

考えられるが、日本教育紙芝居協会機関誌『教育紙芝居』や『紙芝居』などの関連資料の掘り起こしを通してより精緻な分析を行い、日本教育紙芝居協会や川崎大治の果たした役割により明確にすることを今後の課題としたい。

注

- 1 谷口雅子「昭和10年代の児童文化運動—教育紙芝居の運動を中心に—」(福岡教育大学紀要, 第36号、第2分冊、1986年)や堀尾青史「戦中における教育紙芝居運動」『紙芝居創造と教育性』(童心社、1982年)、髯櫛久美子・種市淳子「保育の中の紙芝居—倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを中心に—」(名古屋柳城短期大学研究紀要第28号、2006年)
- 2 松永健哉「紙芝居自叙伝(一)」『教育紙芝居』(第5巻第1号、1942年1月)、17頁。松永「教育の武器としての紙芝居製作と実演—初心者のための手引」扶桑閣、1936年、2頁—5頁。
- 3 松永『教育紙芝居講座』(増訂版)元宇館、1943年、49頁。
- 4 同上「『日本教育紙芝居連盟』について」『生活学校』(第3巻4月号、1937年)、40頁—41頁。
- 5 堀尾勉「教育紙芝居の現在」『綴方学校』(3巻4号、1939年4月)、8頁。
- 6 同上。
- 7 阿部明子・上地ちづ子他『心をつなぐ紙芝居』童心社、1991年、239頁—243頁。
- 8 『趣意書及び規約』日本教育紙芝居協会(1938年7月)、1頁、8頁。
- 9 平林博『体験が語る紙芝居の実際』照林堂書店、1943年、8頁。
- 10 「創刊の辭」『教育紙芝居』(第1巻第1号、1938年9月)1頁。
- 11 「『保育と紙芝居』研究会」『教育紙芝居』(第4巻第5号、1941年5月)26頁。
- 12 川崎大治「農繁期保育所と紙芝居—特に保育技術としての多種多様な活用面について(一)」『教育紙芝居』(第5巻第3号、1942年3月)、7頁。
- 13 前掲「『保育と紙芝居』研究会」
- 14 同上。
- 15 同上、26頁—27頁。
- 16 同上、27頁。
- 17 前掲「農繁保育所と紙芝居—特に保育技術としての多種多様な活用面について(一)」。川崎『季節保育所の経営及び其の実際』産業組合中央会、1940年、1頁—3頁。
- 18 「昭和十六年度春農繁季節保育所用『保育紙芝居』特別頒布に就いて」『教育紙芝居』(第4巻第5号、1941年5月)、12頁。
- 19 「日本教育紙芝居協会保育研究部監修保育紙芝居について」砥上峰次・倉橋惣三『保育と紙芝居—農繁季節保育所を主として』(日本教育紙芝居協会、発行年不明)、11頁。
- 20 関英雄「川崎大治童話論」『日本児童文学』(第26巻第15号、1980年12月)、90頁。
- 21 川崎「童話作家の立場から—企画と脚本について」『少国民文化』(第1巻5号、1942年)、75頁。
- 22 川崎「農繁期保育所に於ける紙芝居利用の実際」『教育紙芝居』(第4巻第4号、1941年4月)、10頁。
- 23 同上、11頁。

- 24 砥上種樹「幼児紙芝居の問題」『教育紙芝居』（第5巻第3号、1942年3月）、5頁。
- 25 『國民保育』（第2巻5月号、1942年）、4頁。
- 26 「秋の保育紙芝居」『教育紙芝居』（第4巻第11号、1941年11月）、6頁。その他、『コグマノボーケン』『太郎熊次郎熊』『バナナ列車』などの数多くの幼児向けの紙芝居が頒布された。
- 27 倉橋惣三「保育紙芝居をおすすめします」前掲『保育と紙芝居—農繁季節保育所を主として』、13頁。
- 28 堀尾青史「戦中における教育紙芝居運動」堀尾青史・稲庭桂子編『紙芝居 創造と教育性』童心社、1978年、323頁—324頁
- 29 砥上峰次『紙芝居實演講座』慶文堂書店、1944年、26頁—27頁。
- 30 橋本宏「實演技術の進展」『教育紙芝居』（第4巻第4号、1941年4月）、22頁。
- 31 砥上峰次『紙芝居の實演—第一歩の理解』日本教育紙芝居協会（発行年不明）、21頁。
- 32 前掲書『保育と紙芝居—農繁季節保育所を主として』、4頁。
- 33 同上、7頁。
- 34 前掲書『紙芝居の實演—第一歩の理解』、28頁—29頁。同上『保育と紙芝居—農繁季節保育書を主として』、7頁。
- 35 砥上峰次「保育紙芝居の生かし方—實演といふことについて」『幼児の教育』（第40巻第8・9号、1940年9月）、44頁、同上『紙芝居の實演—第一歩の理解』、30頁。
- 36 前掲書『紙芝居實演講座』、45頁。
- 37 前掲書『保育と紙芝居—農繁季節保育所を主として』、8頁。
- 38 前掲「保育紙芝居をおすすめします」、11頁—13頁。
- 39 前掲「農繁期に於ける紙芝居利用の實際」、12頁—14頁。
- 40 同上、7頁—8頁。
- 41 川崎「村々に花咲く日—そのⅠ、農繁保育所」『教育紙芝居』（第6巻第9号、1943年9月）、10頁。
- 42 川崎『村の保育所』東京講演会出版部、1942年、172頁。砥上種樹も前掲「幼児紙芝居の問題」の中で、『小猿の恩返し』を事例にして紙芝居の多面的な取扱を示すとともに、それを奨励している。
- 43 前掲「農繁保育所と紙芝居—特に保育技術としての多種多様な活用面について（一）」、8頁—9頁。同上、191頁—193頁。
- 44 川崎「農繁保育所に於ける紙芝居（二）—特に保育技術としての多種多様な活用面について」『教育紙芝居』（第5巻第4号、1942年4月）、50頁—51頁。
- 45 川崎「農繁保育所と紙芝居（三）—特に保育技術としての多種多様な活用面について」『教育紙芝居』（第5巻第5号、1942年5月）、40頁—41頁。
- 46 前掲書『紙芝居 創造と教育性』、326頁。

謝辞：雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』などの資料について、お世話になった群馬県立土屋文明記念文学館や大阪府立国際児童文学館、早稲田大学図書館に対して心よりお礼申し上げます。

Japanese Educational Kamishibai Association and Youji Kamishibai: Activities of the Childcare Research Division

YONEMURA Yoshiki (Shikoku University)

The purpose of this paper is to clarify the role played by the Childcare Research Division of the Japanese Educational Kamishibai (paper theater) Association in establishing Youji Kamishibai (kamishibai for preschool children) by analyzing the activities of the Division of Childcare Research, and using related materials such as the bulletin “Kyouiku Kamishibai”.

This research implies that the Childcare Research Division played a great role in establishing Youji Kamishibai. First, the Division of Childcare Research which specialized in Youji Kamishibai was set up in the Japanese Educational Kamishibai Association, maintaining distance from Kokusaku Kamishibai (war propaganda kamishibai). This division held meetings of the Society for “Childcare and Kamishibai” in order to investigate various themes regarding kamishibai. Second, the members of the Society for Youji Kamishibai of the Division of Childcare Research lived with children and made a lot of Youji Kamishibai in collaboration with individuals on site. Those kamishibai which Daiji Kawasaki mostly wrote were excellent and interested many children. Third, the Japanese Educational Kamishibai Association published a pamphlet “Childcare and Kamishibai” and demonstrated basic kamishibai performance techniques that any storyteller could perform. Fourth, concerning the organic relationship between childcare and kamishibai, Daiji Kawasaki explained the necessity of grounding kamishibai firmly on childcare programs, and illustrated various methods on how to use kamishibai.